

15	豊川	豊川市立御油小学校	タダノ ナツミ 名前 多田野 夏未
分科会番号	1	分科会名	国語教育（文学その他）

確かな読みをもとに自分の考え方の変化に気づき、深められる子の育成

1 はじめに

本学級の子どもは、明るく積極的で、何事にも前向きに取り組める子が多い。授業中も、さまざまな場面で活発な意見交流が行われる。しかし、発言の内容は思いつきのものが多い。中には、周りに流されてしまい簡単に自分の意見を変える子もいる。また、文章の中になじみのない言葉が使われていたり、理解できない言葉が多かったりすると、読む意欲をなくしてしまう。一度難しいと感じると、すぐに諦めてしまう傾向がある。そこで、登場人物の気持ちと関連づけながら言葉に迫っていくことで、隠れている意味に興味をもてるようにしたい。また、子どもたちの意見交流は思いつきによる発言が多いため、根拠がなく深まりを感じられない。意見交流を通して言葉の意味の捉え方はたくさんあることに気づき、そのおもしろさを感じ取れるようになってほしい。

「大造じいさんとがん」は、読んでいく中で、大造じいさんの残雪に対する気持ちの変化を読み取ることができる物語である。大造じいさんの気持ちが変わった理由は何か、叙述に立ち返り、自分で考える必要がある。また、現代では見る機会のない狩りの様子や道具も登場する。見たことのないものを、叙述をもとに想像する力が必要になる。この単元を通して叙述をもとに、自分で考える力を身につけさせたい。

2 めざす子ども像

- ・自分の考え方の変化に気づき、読みを深められる子
- ・叙述と結びつけてイメージをもつことができる子

3 研究の仮説と手立て

【仮説Ⅰ】

中心人物について読み取ったことを記録したり、朗読で表現したりしていけば、自分の考え方の変化に気づき、読みを深めることができるだろう。

〈手立てⅠ－①〉中心人物の心情の変化を「大造じいさん紹介カード」という1枚のワークシートにまとめさせる。

人物像を理解するためには、物語で起きた出来事や、登場人物の心情を読み取ることが大切である。そこで、登場人物についてわかったことをまとめる手段として、「中心人物である大造じいさんの人物像を紹介するカード」を作る活動を設定する。それを積み重ねることで、読みの変化を可視化できるようにする。中には、同じ場面を読んでも、人物像の捉え方が人によって違う場合がある。他の人はどう考えたのかを知る機会として、授業の終わりにカードに書いたことを隣の人に発表する時間を設ける。また、自分の読みの変化を捉えるために、単元終了後に紹介カードを読み直し、振り返る時間を設定する。

〈手立てⅠ－②〉自分の読みの深まりを、朗読で表現させる。

朗読とは、物語から想像したことに対して、自分が思ったことや感動したこと表現したものである。そこで、単元の初めに音読と朗読の違いがわかるように教師が読み聞かせをする。違いを知ること、物語を読んで自分の心が強く動いた経験が必要ということに気づかせる。また、単元の終わりに自分のお気に入りの場面を朗読することを伝え、自分が最も心が動く場面はどこになるのか、探しながら学習に臨めるようにする。朗読は、声の大きさや速さ、間のとり方を工夫するポイントとして示す。

【仮説Ⅱ】

視覚に訴える資料を活用すれば、情景を思い浮かべることができ、叙述と結びつけてイメージをもつことができるだろう。

〈手立てⅡ〉物語に登場する人物や道具の掲示物を準備し、実際に操作させる。

人物像を理解するためには、情景を思い浮かべることが重要となる。しかし、物語には現代では実際に見る機会が少ないものも登場する。大造じいさんが準備した道具や捕まえる方法を理解させるために、実物の写真を提示する。また、残雪の動きや大造じいさんと残雪の距離感など、読むだけでは想像しにくい部分は挿絵を操作させ、イメージを広げられるようにする。

4 研究の計画

(1) 単元について

本単元の指導にあたっては、子どもたちの意欲を継続させるために、初発の感想をもとに「不思議に思ったこと、みんなで考えたいこと」を集め、単元全体の学習課題を設定する。加えて、単元の終わりに自分のお気に入りの場面を朗読することを伝え、自分が最も心が動いた場面を探しながら読み進めるようにする。その後は、大造じいさんの残雪に対する思いを読み取り、心情の変化を追っていく。その中で、中心人物である大造じいさんについてわかったことを「大造じいさん紹介カード」にまとめ、毎時間書いたことを隣の子と伝えあっていく。また、単元の終わりに紹介カードを見直すことで、残雪との関わりの中で変化した大造じいさんの様子について捉えられるようにしたい。読み取りの際には、本文に出てくる道具の写真を準備し、状況をイメージしやすくする。また、実際に挿絵を操作させ、大造じいさんと残雪の行動について理解できるようにする。単元の終わりには、最も印象に残った場面を選び、朗読をする。印象に残った理由を考え、その気持ちが朗読で伝わるように工夫して表現できるようにする。

(2) 抽出児について (A児)

本研究では、授業での活動の様子や振り返りの記述をもとに、抽出児の変容を追うことによって、仮説における手立ての有効性を明らかにしていく。A児は想像力豊かで、登場人物の心情を考えることが好きな児童である。加えて、自分の意見をたくさん書くことができる。しかし、自分の想像だけで考えることがあり、他の子から「どうしてそう思うの？」と聞かれることがある。そのような質問を受けると、答えられず自分の書いた意見を取り消してしまったり、話し合おうとする意欲をなくしてしまったりする。単元を通して、自分の考えを1枚のワークシートに記録したり、朗読練習を繰り返したりする中で、自信をもって自分の意見を述べ、考えを深める姿を期待する。

5 研究の実際と考察

(1) 中心人物の心情の変化を「大造じいさん紹介カード」という1枚のワークシートにまとめさせる

単元の初めに初発の感想を書かせた。感想の他に物語の中で不思議に思ったことがあれば書くよう指示したところ、A児は「なぜ大造じいさんは残雪を助けたのか不思議」と書いていた。A児だけでなく、「なんで敵だった残雪を助けたの?」という疑問をもつ児童が多くいた。そこで、授業は子どもたちから出た疑問をもとに学習課題を設定し、展開していくことにした。続いて、本文を「プロローグ」「うなぎばり作戦」「たにし作戦」「おとり作戦」「はやぶさの乱入」「その後」の七つの場面に分けた。それから、場面ごとに1時間ずつ学習していった。1時間の流れは、次のとおりである。①大造じいさんの気持ちについて分かるところに線を引く。②そこから考えられる大造じいさんの気持ちをノートに書く。③どこに線を引いたのか、そこから考えたことについてクラスで話し合う。④話し合いを経て考えた大造じいさんの人物像を「大造じいさん紹介カード」へ記入する。⑤隣の子に書いたことを発表する。この流れを1セットとして扱う。以下は各場面の学習の様子とA児の大造じいさん紹介カードへの記述である。

【プロローグ】

多くの子が「いまいまして思っていました」という叙述に着目していた。大造じいさんは狩りを生業としているが、残雪が来るようになってから、一羽のがんも手に入られていない。その大造じいさんの不愉快な気持ちを、「いまいまして」という言葉から想像できていた。A児も大造じいさん紹介カードに「残雪のことをきらいに思って、戦いにいどもうとしている人」と書いていた。

【はやぶさの乱入】

大造じいさんの計画も、はやぶさの乱入により状況が変わってしまう。ここでは、仲間を助けるために敵に挑んでいる残雪の姿に着目する子が自然と増えた。残雪を見て、銃を下ろした大造じいさんの気持ちを考えさせたところ、「こんないいやつ、うちたくない」という考えが出された。そこで、「初め、大造じいさんは、最初は残雪のことをどう思っていた?」と問い返すと、多くの子が自分の書いた「大造じいさん紹介カード」を見直し始めた。そこで「いまいまして」と「いいやつ」は反対の気持ちであることが確認できた。A児も自分のカードを見ながら「初めは、いまいましてと言っていたから、残雪が嫌いだった」と発言した。(資料1)

【その後】

最後の場面では、「大造じいさんはなぜ残雪を助けたのか」について話し合った。多くの子が疑問に思っていたテーマである。助けた理由について聞くと、「仲間だから」と考える子と「ライバルだから」と考える子で分かれた。A児は「ライバルだから」と初めから考えていた。「仲間」という子は「『おれたちは』とあ

T: どうして、大造じいさんは銃を下ろしたの?
B: 気があると思ったから
C: こんないいやつ、うちたくないと思ったから
T: 初め、大造じいさんは残雪のことをどう思っていたの?
(自分の大造じいさん紹介カードを見直すA児)
A: 初めは、いまいましてと言っていたから、残雪が嫌いだった

資料1 授業記録

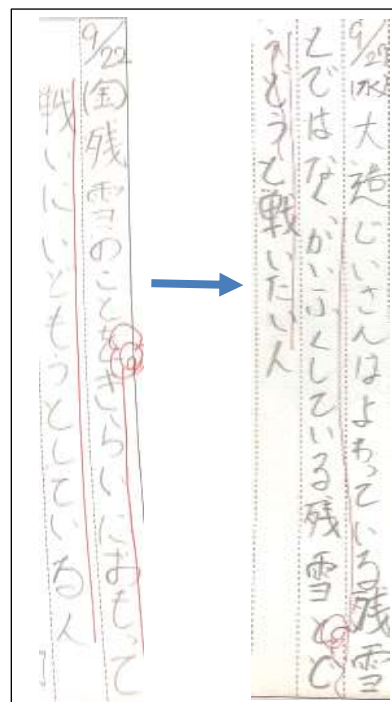
り、自分と同じ立場と考えているから」という理由を挙げた。一方「ライバル」という子は「『また戦おう』と言っているが、仲間だったら戦おうとしない」と主張した。A児は周りの子の意見を聞いて、「大造じいさんは、弱っている残雪とではなく、かいふくしている残雪と堂々と戦いたい人」と紹介カードにまとめていた。

毎時間、紹介カードにまとめたことで、大造じいさんの心情に変化が起こった際に、すぐに前時までの学習を確認することができた。A児も【はやぶさの乱入】では、自分の書いたカードを見直していた。その結果、残雪に向けた銃を下ろした大造じいさんの気持ちは、残雪のことを嫌いだと思っていた【プロローグ】から考えると、違いがあることに気づくことができた。そして【その後】では、「弱っている残雪とではなく、堂々と戦いたい人」と書いていた。(資料2) これらのことから、A児は大造じいさん紹介カードをまとめることを通して、大造じいさんに対する考え方の変化に気づき、読みを深めたことがうかがえる。

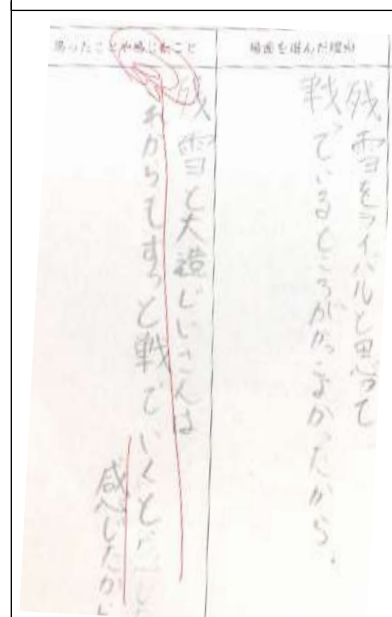
(2) 自分の読みの深まりを、朗読で表現する

単元の初めに音読と朗読の違いを感じさせるため、教師が読み聞かせを行った。音読は、大きな声ではっきりと読み、朗読は声の強弱をつけたり、間をとったりして読み聞かせた。聞き比べた感想を聞くと「朗読の方が気持ちがかもっている」「実際にその場面を思い浮かべられる」という意見が出た。そこで、朗読とは物語から想像したことに対して、自分がどう思ったことや感動したことを表現したものであることを伝え、朗読するには自分の心が動いた経験が大切だということを確認した。その後、単元の終わりに自分の気に入った場面を朗読することを伝え、学習に入った。

大造じいさん紹介カードを読み直したあと、朗読する場面を各自で選んだ。A児は、自分の紹介カードを見直しながら、最後の場面を選択した。その理由を「残雪をライバルと違って戦っているところがかっこよかったから」と書いた。仲間かライバルかを話し合ったことで、大造じいさんと残雪はライバルであるという考え方が強くなったことが感じられる。また、紹介カードに自分の読みが表れていることから、自分が最も心が動いた場面を選びやすかったようである。朗読練習では、大造じいさんのせりふである「おうい、がんの英ゆうよ…」の「おうい」の言い方を何度も何度も読む練習をしていた。理由を尋ねると「大きな声で言うと、怒っているように聞こえるから。でも、残雪に遠くに届くような声で言いたい」と主張していた。自分が納得できる言い方になるまで、繰り返し練習に取り組む姿から、この場面に対するA児のこだわりが伝わってきた。



資料2 A児の紹介カード
左：【プロローグ】場面
右：【その後】の場面



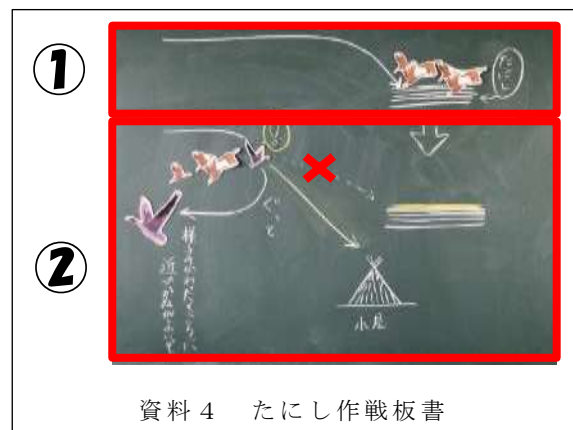
資料3
右：朗読場面を選んだ理由
左：朗読発表後の感想

A児の朗読を聞いた子の感想に、「感情がこめられていて上手」とあり、思いの強さが聞いている子にも伝わっていた。これらのことから、A児は朗読を通して大造じいさんの残雪に対する考え方について読みを深めたことがうかがえる。

(3) 物語に登場する人物や道具の揭示物を準備し、実際に操作させる

物語を読む中で、子どもたちにとって見たことのないものが多く出てきた。物語に出てくる「うなぎばり」について、うなぎを釣るために使う釣り針であることを知らないという児童が多かった。魚に使う釣り針も、本物を見たことがないという児童もいた。授業では、うなぎばりの絵を黒板にかき、かえしのところをたにしの写真で隠して見せた。そうすると、そのまま食べると上顎に針が刺さってしまい逃げられなくなる、という状況を理解することができた。作戦の内容を知ると、これを回避するために仲間を先導した残雪の賢さに驚いていた。そこから、大造じいさんが「感たんの声」を上げた理由について、「鳥なのにすごいなあ」「がんにしてはよくやったな」と自分の考えを述べることができた。

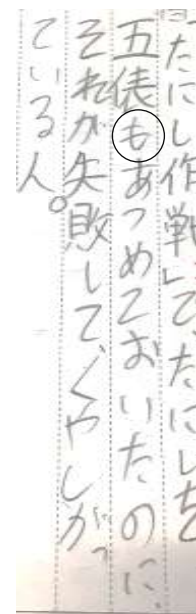
たにし作戦では「五俵ばかり」という言葉が出てくる。米が入っている俵の写真を見せたあと、「みんなは体重何キロぐらいある？」と問いかけた。20キログラムぐらいと発言した3人を呼び、「1俵はだいたいこれぐらいの重さだよ」と伝えた。1俵あたり約60キログラムぐらいあることを知り、改めてその量の多さに驚いたようである。このたに시를大造じいさんは初めはばらまきだけにしておき、がんが警戒心を抱くことがないようにしていた。このことを、資料



資料4 たにし作戦板書

4①のように示した。作戦実行の日に、じいさんは少し離れた所に小屋を建て、がんを狙っていた。資料4②のように板書に小屋の絵をかき足したあと、「この日も、がんの群れはこのえ場に行った？」と聞いた。そうすると、「違う」「この日は行かなかった」と声があがった。「この日はどうしたの？」と問い返し、挙手した子どもを前へ出させて、挿絵を操作させた。指名された子は残雪の挿絵を動かし、え場には行かずに別方向へ行く様子をクラスの前で見せた。(資料4②)「ぐっと急角度に」という叙述にもふれ、残雪たちの動きを確認した。

A児はこの日の大造じいさん紹介カードに「五俵もたにしをあつめておいたのに、それが失敗してくやしがつている人」と書いていた。(資料5)「五俵も」と表現していることから、準備にかかった手間の大きさを実感できていると思われる。これらのことからA児は視覚に訴える資料によって情景を思い浮かべ、叙述と結びつけてイメージをもったことがうかがえる。



資料5
A児の
大造じいさん紹介
カード

6 研究の成果と課題

(1) 中心人物の心情の変化を「大造じいさん紹介カード」という1枚のワークシートにまとめさせる

【成果】

初発の感想を書かせた際に「なぜ大造じいさんは残雪を助けたのか」という疑問が多く上がっていた。おそらく、初めは大造じいさんのことを「残雪のせいで狩りができなくて困っている人」と捉えていたのではないか。しかし、はやぶさと戦う残雪を見て、銃を下ろした大造じいさんに対しては「こんないいやつをうちたくない」という意見が出た。そこで大造じいさん紹介カードを見直させたことで、大造じいさんの残雪への気持ちが、「いまましい存在」から「いいやつ」と変化したと実感した子どもが多くいた。自分の考え方の変化に気がつくことができたと感じる。今までの自分の読みが学びの足跡として残ることで、自分の考えの変化に気づき、読みが深まったと考えられる。

単元の終わりに、改めて大造じいさんの人物像を書かせたところ、「大造じいさんは獲物を捕まえたくていろいろひきょうな作戦をたてる人でしたが、残雪と関わる中で優しくていい人になりました」のように書く子が多かった。けがを負った残雪を手当てし、逃がしてやる行為を子どもたちは「優しい」と捉えていたようだ。大造じいさんの行動は優しさからくるものではないが、児童の中では命を助けることは優しいという捉えであった。大造じいさんの思いや行動を表す語彙を増やしていく必要があると感じた。

(2) 自分の読みの深まりを、朗読で表現する

【成果】

朗読は児童も好きな活動であったため、楽しく取り組むことができた。また、他の子の発表を聞くことで、改めてその場面のよさに気づいた子もいた。読みの深まりを朗読で表現することは、考えて言葉で書くことが苦手な子も取り組むことができる有効な活動だと感じた。

【課題】

場面を選ぶ際に、「このせりふを言ってみよう」という理由で選んでしまう子がいた。A児のように、思いがあって選んでいる場合はよいが、何となく選んでいる子もいた。選ぶ根拠のもち方について、詳しく指導する必要性があった。

(3) 物語に登場する人物や道具の揭示物を準備し、実際に操作させる

【成果】

視覚的資料の有効性を改めて実感することができた。言葉の意味を知ることによって、大造じいさんのがんを捕まえたいという気持ちの強さと、それを回避する残雪の賢さを感じることができた。【たにし作戦】のときに夏の間に準備したたにしの量を知ると「そこまでして捕まえたいんだ」「本気なんだね」という意見が出た。叙述をもとにイメージを広げる姿が見られた。

【課題】

挿絵が有効だった場面もあるが、情景描写から読み取る必要のある場面では、苦手な子は考えられずにいた。情景描写について、より多くの子どもが読み取ることができるような効果的な支援方法を考えていきたい。